

# 博士学位論文審査要旨

2012年6月9日

論文題目：九州縄文文化の研究-九州からみた縄文文化の枠組み-

学位申請者：水ノ江 和同

審査委員：

主査：文学研究科 教授 松藤 和人

副査：立命館大学文学部 教授 矢野 健一

副査：魚津市立図書館 館長 麻柄 一志

要 旨：

東高西低の縄文文化論が敷衍化するなかで、九州の地に展開した縄文文化が東日本とは異なった生態学的背景のもと独自の展開をみた事実が近年の調査・研究の進展で明らかとなってきた。日本列島の西端に位置し朝鮮半島や琉球列島に隣接する本地域の研究は、東日本を中心に醸成されてきた縄文文化観を相対化するうえで重要な意義を有する。

本論文は、申請者が長年取り組んできた九州縄文土器の型式編年研究を基軸に、集落構造、竪穴建物、炉穴、貯蔵穴、漁労具、装身具、呪術具などの出現・変遷をきめ細かく検討するなかで、九州の縄文文化の実態解明を追究した意欲的な研究である。これまで個別事例研究が多くの先学によってなされてきたが、本州に展開した縄文文化との比較を視野におきながら、申請者自身による一貫した編年体系にもとづいて草創期から晩期まで約1万年間に及ぶ縄文時代の遺構・遺物を対象に生業から精神分野にいたる文化動態を通時的かつ地域的に分析し、九州縄文文化が日本列島に展開した縄文文化の枠組みの中に収まることを確認し、生態系の安定による人口と集落数の増加にともない近畿・中四国では見られない集落構造（環状集落、集落の2群化）、生産用具、呪術・装身具を創出するなど九州縄文文化の特質を解明するのに成功している。

本論文では、なかば定説化した西北九州と朝鮮半島との文化的一体論をも検証する。半島の楯目土器との関連で議論されてきた曾畑式土器、半島と九州で出土する結合式釣針（西北九州型釣針）、半島で出土した縄文系遺物の比較検討から、技術導入に関わる言語上の問題を指摘する。さらにまた、これまで議論のあった南島とりわけ奄美・沖縄諸島の縄文文化の評価についても近年の調査成果をもとに再検討し、南島と九州本土の縄文土器との一体性の背景に目視可能な島伝いによる断続的な往来を想定するとともに、先島に縄文文化が及んでいない事実を当時の航法に絡めて説明する。

本論文は、現時点における九州の縄文文化研究の到達点を示し、今後の研究への貴重な指針を与えるものである。また本論文の随所にみられる手堅く慎重な研究方法は、申請者の深い学識と見識を反映するものである。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 学力確認結果の要旨

2012年6月9日

論文題目：九州縄文文化の研究-九州からみた縄文文化の枠組み-

学位申請者：水ノ江 和同

審査委員：

主査：文学研究科 教授 松藤 和人

副査：立命館大学文学部 教授 矢野 健一

副査：魚津市立図書館 館長 麻柄 一志

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年6月9日、14:00から約3時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文に関して審査委員3名からの研究内容に関わるさまざまな質疑に的確に応答し、本論文の研究水準の高さと学術的価値を証明した。さらに申請者は語学（韓国語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：九州縄文文化の研究 ―九州からみた縄文文化の枠組み―

氏名：水ノ江和同

要旨：

「縄文文化とは何か？」という設問にたいし、多くの考古学者は世界史的な新石器文化の概念を援用しながら、「縄文文化とは、新石器時代の基本的な生業スタイルとされる農耕や牧畜をおこなうことなく、狩猟・漁撈・採集による生業スタイルを完成させ、造形的に卓越した縄文土器、土偶・石棒といった個性的な呪術具、美しくも複雑な石製や骨角製の装身具などを巧みに作り、それを生活の必需品としながら、自然環境を崇拝しつつそれと共生することで、世界史的に類をみない豊かな営みを実現した文化」という模範解答を語るであろう。確かに、こういった解答は一見射的を射ているようであるが、「ではどのような理由で縄文文化はほかの文化と異なるのか？」という具体的な設問になると、適切な解答ができないのが現状である。

世界的にみても突出した発掘調査件数と報告書刊行数を誇る日本では、個別研究や地域史研究によりきわめて精緻な縄文時代の生活復元や、集落構造・祭祀行為・地域間交流などの復元に多大な成果を収めてきた。ところが、個々の研究成果は縄文文化全体のどの部分に位置するのか、あるいは縄文文化の本質究明作業のどの段階にあり、どういう手順でそれを実現するのか、といった縄文文化研究の最終到達点の確認やそこにいたるロードマップ作成にたいする意識は希薄であり、「木をみて森をみず」的な状況に陥っているといわざるを得ない。

まず、第Ⅰ章においては上記のように、縄文文化研究の問題点抽出とその解明に関する動機づけをおこなったのち、第Ⅱ章において、九州における縄文文化研究の経緯を確認する観点から、1930年代以降、九州縄文文化研究と一体的に進められてきた縄文土器研究の経緯を詳細に分析した。

第Ⅲ章においては、筆者が20年以上にわたって積み重ねてきた九州の縄文土器編年研究、これは九州の縄文時代草創期から晩期までの約1万年間に及ぶ縄文土器の変遷、さらに、南島（奄美諸島・沖縄諸島）をも含めたものを今回あらためて再整理・再構築した。縄文時代という文献史料のない時代を研究する場合、歴史的変遷を追うための「時間の物差し」としての縄文土器編年は不可欠である。1930年代以降九州においては、特定の時期、特定の地域に関する縄文土器の編年研究が多くの研究者によって進められてきたが、一人の研究者が一貫した方法論で九州全体の縄文土器編年を完成させたのは本研究が初めてである。これにより、地域間における併行関係の齟齬や時期ごとにおける土器編年の基準の変動はなく、各種遺物・遺構・遺跡の時間的変遷も的確に追え、従来にない精緻で安定した九州縄文文化の変遷追究が可能になった。

そして、九州の縄文文化の本質を明確にするための基礎的な作業として、筆者の縄文土器編年を駆使しながら、第Ⅳ章では縄文文化が育まれる集落の構造と変遷を、第Ⅴ章ではその集落の構成要素となる墓地・低湿地型貯蔵穴・落とし穴・集石・炉穴の実態と変遷を、第Ⅵ章では九州の縄文文化を特徴づける遺物、すなわち、石斧・石鋸・石銛といった利器、土偶・石棒・石刀・仮面形貝製品といった呪術具、球状耳飾・管玉・勾玉・大珠・簪といった装身具など、九州の縄文時代におけるほぼすべての遺跡・遺構・遺物について詳細な検討をおこなった。

その結果、九州の縄文文化は、もちろん日本列島の縄文文化の枠組みに収まるものであるが、動植物生態系の安定による人口と集落数の増加にともない、近畿・中四国ではみられない集落構造（環状集落や集落の2群化、貝塚や低湿地遺跡など）、生活道具（利器）、精神文化（呪術具と装身具）を活発に創出・展開させたという、他地域では類をみない個性的な特質の存在を明らかにした。

さらに、九州縄文文化の諸問題として、第Ⅶ章前半では、近年よく問題になる縄文土器研究、特に

押型文土器や西平式土器の実態解明、早期末葉文化と当該土器の評価、中期土器と後期土器の境界問題、放射性炭素年代測定と黒川式土器の問題についても、研究の経緯と問題の所在を明らかにしたうえで、筆者の見解を示した。

第Ⅶ章後半では、九州縄文文化の諸問題の一つでありながら、実は九州縄文文化の本質を考えるうえで不可欠な南島の問題と、それによって派生する縄文文化の境界に関する検討はきわめて重要である。南島は日本列島のなかでも島嶼という地理的条件と亜熱帯という自然環境から、総体としては縄文文化の範疇に入るが、個別としてはきわめて個性的な文化を育てている。このことは、九州島から沖縄本島まで島伝いに次の島影は晴天時には目視でき、人の行き来も頻繁であったことは明らかであるが、それに伴いおこなわれる情報交換が、濃密になり縄文文化と類似する文化になるときもあれば、疎遠になりまったく独自の文化を構築するときもあることからわかる。

これにたいし、対馬と朝鮮半島南海岸も、晴天時にはお互いの島影・陸地を目視でき、わずかながらも人の行き来は確認できるが、頻繁に情報交換をおこなった形跡、つまり文化的な影響をお互いに及ぼした、あるいは受け容れた痕跡はまったく存在しない。稀に似たような考古遺物は出土するが、それは外見だけの類似で中身・本質はまったく異なるものである。

こういった事実関係にもとづき、本論文では、より厳しい地理的条件と自然環境下にある南島と、対馬とは近い距離にある朝鮮半島南海岸との交流実態の相違を詳細に検討した結果、その要因が共通する「言葉」の有無にあることを筆者は看破した。すなわち、遠くにみえる島影に人が住んでいることは知っていても、その人たちとはたして言葉による意思の疎通が可能かどうか、九州の縄文人と朝鮮半島南海岸の新石器人は互いに認識していたのである。九州と朝鮮半島南海岸との間で、この言葉による意思の疎通が初めて可能になったのが、弥生文化成立の象徴とされる稲作農耕技術の導入であった。技術の導入は視覚的な情報交換では得ることはできず、やはり言葉による情報交換が不可欠なのである。

では、このような視点から異文化に接するほかの縄文文化の事例を検討すると、たとえば、宗谷岬と樺太は宗谷海峡を挟んで目視できる距離にあるが、人の行き来は確認できても文化的な交流は認められない。択捉島と得撫島を挟む択捉海峡においても同様のことがいえる。したがって、北海道の2地域においても、対馬と朝鮮半島南海岸との関係と同じ状況が生じていたと考えられる。伊豆諸島でも島伝いに島影が目視できる八丈島までは、縄文文化の存在が確認できるが、目視できない距離にある小笠原諸島には縄文文化の痕跡は窺えない。

以上の検討から、縄文文化の枠組みを規定する一つの要素として「言葉」がきわめて重要であることが明らかになった。考古学では言葉の構造復元はもちろん、その系譜を推定することはできない。そのため、考古学における言葉へのアプローチはこれまでタブーとされてきた。しかし、今回の筆者の研究により、縄文文化の発展と拡散には「言葉」の存在が不可欠であること、さらにそれは、視覚だけではできない高度な文化的情報の交換を可能にしたことを初めて明確にした。

さて、このような検討を踏まえ最終章である第Ⅷ章では、あらためて九州縄文文化の全体的な変遷を、あらゆる角度から総合的に検討した結果、早期後葉・早期末葉・後期初頭・後期後葉の4回にわたって大きな画期が存在することを今回初めて明らかにした。これらはいずれも、それまでの九州にない要素の出現や、従来あったものが急増するといった諸現象の集積である。通常、こういった大きな画期は近畿・中四国といった西日本はもちろん、日本列島全体の大きな胎動に連動して影響を受け生じるものである。しかし、九州は近接する近畿・中四国とは必ずしも連動することなく、九州の自然環境はもちろん、九州が育ててきた文化的伝統にうまく適合させながら、そして、朝鮮半島とは一線を画しつつ、南島とは断続的な関係を保ちつつ、九州独自の大きな文化的画期を形成したのである。すなわち、九州独自の集落構造・生活道具・精神文化を創出・展開させ、地域間交流を活発におこなう九州の縄文文化は、さらに「言葉」という観点から、日本列島の縄文文化の枠組みを考えるうえで不可欠な存在であるといえ、これこそが九州縄文文化の最大の特質として位置づけられるのである。